

本
当

佐々木 佳 子 青 森

手の中のこれはケセランパサランか真実はもう風に舞ひたつ
考へがらせん階段のぼる日は空とぶ鳥の眼がほしくなる
硝子質の大気の青にとらはれて十月のわれは物質と化す
「本当は」と言ひ出すときの本心は本当からは少し離れる
栗の皮むく方法が千通りネットにありぬそれにつまづく

白き東北

薄 葉 茂 宮 城

いきなりの夏終焉でもの悲し短くなりぬ東北の秋
秋深しコロナ、暑さに耐へてきて背後に迫る白き東北
広瀬川の水すくなくて川底の見える浅瀬のサギの白首
弓を射るごとく剛球投げて来し松坂大輔最後は四球
われもまた退く歳の近づきて時折歩速を緩めてゐたり

風

島 本 ちひろ*埼玉

自問しているのだらうか夕風にかそかに揺れる緑蟪蛄
運命という言葉葉さえなかつたら つぼみのままで枯れた白百合
限りなく透明からは遠い青インディゴブルーのジーンズを買う
ひとりっ子のわれが育てる兄弟はよくけんかをし寄り添いねむる
泉から吹く風海から吹く風と出会って街を吹く風となる

南止遺跡

中津川 靱 坐 埼玉

わが家より徒歩で3分二万年まへの人らの南止遺跡^{みなし}
落し穴、ナイフ形石器、焼けた石遺跡より出て暮しが見える
旧石器時代ゆ縄文前期まで人のゐし跡墓苑になりぬ
ご近所にゐし縄文人子を育て、働き、笑ひ、病みて死にけん
旧石器時代の恋も照らしたる十五夜の月妻と見てをり

母に会ひたし

伊 沢 玲 千葉

水曜のあさダンボールひと束を出してその分涼しきわが家
へ「正常化バイアス」強き夫とわれ「平気、平気」とお茶ばかり飲む
十五夜の月のひかりを手に受けてたしかめてゐる今日の嗅覚
わたしならしやがんでしまふ三日三晩雨に打たれて立つプラタナス
この秋はきんもくせい^{きんもくせい}が二回咲き二回散り敷き母に会ひたし

神さぶ

立 花 純 子 新潟

きらめける陽射しのなかをオニヤンマ真一文字に風景を切る
水平に飛ぶ鬼蜻蜒^{きんせう}つくて淋しき男の横顔に似る
国民ノ堪忍袋ノ緒ヲツナグ十万円ヲバラマイテオケ!
なにもかも分かつてるよと十五夜の月がわたしを光でつつむ
十五夜の月読凜々し天高く昇りゆくほどひかり神さぶ

孫の手

鷺巢錦司 静岡

闇の世に坐禅せると天心に澄みわたりたる中秋の月
ゆつくりと朝の空を渡りゆく羊雲あり 芙蓉の上に
人生の加害者であつたか被害者であつたか解らず死んでゆくのか
水槽にすいすいメダカが泳いでるみな上ばかり見て泳いでる
孫の手は百円なれど孫のなきわれには無口でやさしい孫の手

アラビアの文字

山田恵里 愛知

カプールのあをぞら刺して白旗にのたうつやうなアラビアの文字
しがみつく人を空よりこぼしつつか上昇しゆく米空軍機
学祭のテントをくぐるとんぼなく風のカーテン閉ぢられし秋
鋭角にビルを吊りたる屋上のクレーンそろそろ疲れて赤い
もう風に芯が出てきてまだらなるコキアの赤をつきぬけてゆく

豆腐

小沢博子 京都

スーパーの一角に白い湖うみのあるごとく豆腐の水がしづもる
スーパーに豆腐がならびわが裡の白いページがゆらりとひらく
まっ白で角ばる豆腐に憶ひ出す几帳面でやさしいあの人
豆腐の味しみじみわかり味はへる良い年齢に踏みいりてゐる
皿の上にしんと真白き絹豆腐バタバタと過ぎた一日を恥ぢる

祭礼のなし

中村 信一 広島

限界集落越えて無人となりはてつ雀もなかぬ父の故郷
御輿かつぐ若きらへりてコロナ禍に幸か不幸か祭礼のなし
わが顔をひと巡りして熊蜂消ゆ翅音と風と恐怖残して
カレンダー赤字のままなる十一日たまにしか来ぬバスをのがしぬ
ごり押ししの五輪の総活終へぬまま衆院解散はじまる選挙

雨

有川 知津子 福岡

雨とあめ絡み合ひつつ落ちゆけりわれの開ける傘のふちより
とうめいな雨のしづくよ花過ぎしアガパンサスの茎を流れて
はじまりがあれば終はりがあるものを咲き継ぐ花はみなちがふ花
秋の夜のまぼろしひとつ祖母若くものほし竿を拭うてゐたり
切なかる母をさそひしふたりたび熱帯雨林にふる雨をみた

昭和のかぜ

江頭 洋子 長崎

うづ巻の蚊取線香形のまま燃え尽きぬかくわがその時も
夏の日々昭和のかぜをくれしかな扇風機二台たんねんに拭く
パラソルとハンカチ二枚失くしたるこの夏逝きぬちちる虫鳴く
突然に秋は来にけりこの年のごきげんよろし竜田姫はも
酔で殺す叩く刺す剥ぐ潰すなど旨い料理のむごいプロセス